紀要

vol.42　2017

京都嵯峨芸術大学・京都嵯峨芸術大学短期大学部

味と匂い研究会2016年度活動報告

岩　﨑　陽　子

０．2016年活動概要

当研究会は、五感の中でも比較的先行研究の乏しい「味覚」と「嗅覚」を取り上げ、それらの特性を検証した上で、感覚による世界認識の新たな在り方を、アート・デザインのかたちで提言することを目的として2012年４月に京都嵯峨芸術大学で設立された。

メンバーは京都嵯峨芸術大学の教員である坂田岳彦（デザイン）、岩﨑陽子（哲学・美学）、松本泰章（メディアアート）が中心となり、かつ学外からも真板昭夫（北海道大学・観光デザイン）、また学生との共同研究を行うPerfume Art Projectから成る。

前年2015年度は、京都とパリの両都市でのPerfume Art Projectとしてパリ・ボザールの学生とのアート交流、健光園における「匂いによるユニバーサルデザイン」の作品制作、スタッフアンケート実施、学会成果発表（坂田・岩﨑）、Boris RAUXとMaki UEDAの講演会実施、香りのアート展覧会「黒髪とマドレーヌ」開催など、香り・匂いに関わる多彩な活動を精力的に実施した。

今年度は、何よりもまず当メンバーが昨年度までの３年間に引き続き香りをテーマにして、新たに科研費を取得することができたのが大きな成果であった。

また前年度にも増して海外との連携を強化し、学生交流や講演会など、特にフランスに加え、新たにイギリスとの交流活動も精力的に行った。

今年も多くの方々の援助と期待を受けて、無事に計画通りにプロジェクトを実施することができた。

今年度の主な成果を挙げる。

①新たな科研費取得
②京都芸術センターにおける香りのアート日仏学生交流展「ここ・そこ・あそこ」の開催（７月）
③フランス・サンテティエンヌにおける香りのアート日仏学生交流パフォーマンスOdor Odoriの開催（10－11月）
④ソルボンヌ大学哲学教授・シャンタル・ジャケ先生招聘「香りと音楽」講演会開催（同志社大学ハーディーホールにて）（10月）
⑤ロンドン大学附属・セントラル・セント・マーティンズ校のネイサン・コーエン教授講演会「アートとサイエンス」（７月）
⑥ロンドンでの香りのアート講演会、パフォーマンス（12月）
⑦教員と生徒による研究活動―香りの蒸留抽出実験／沈香の人工栽培についてレクチャー聴講／伝説の香木伝来の地・枯木神社訪問

以下順に上記７点について詳述する。

１．新たな科研費取得

前年度2015年まで３年間続いた科研費研究「「味と香り」による空間のユニバーサルデザイン」に引き続き、今年度2016年より３年間にわたり、新たに「特設分野研究　ネオ・ジェロントロジー」分野で、「「懐かしい匂い」と創造活動による認知症の人の安心できる居場所作りとその効果検証」（代表：杉原百合子・同志社女子大学）というテーマでの採択が決定した。これは医学、薬学、看護学、心理学、芸術など学際的な内容の研究であり、他大学や研究所と提携した。前回よりも参加人数としても規模の大きな香り研究となる。

テーマの概要は以下である。

認知症の人々は、疾患がもたらす中核症状に、焦りや不安あるいは落ち着けない環境等の要因が加わることで、不穏や妄想などの行動・心理症状（BPSD）が引き起こされる。そのため、認知症の人が安心して過ごせる“なじみのある”環境作り、また本人の快感情に働きかけるケアが大切である。本研究では、非薬物療法の一方策として、「懐かしい匂い」を使った嗅覚への刺激と認知症の人自身が参加して行う「アート制作活動」を融合させたプログラムを開発し、その効果を医学・心理学・看護学のアプローチを用いて実証的・定量的に測定・検証を行うことで、認知症の人にとって安心できる居場所作りを目指し、行動・心理症状（BPSD）の軽減を図ることを目的とする。「懐かしい匂いをツールとした他者とのコミュニケーション」が活性化されQOLを高めることを研究の目的とする。

研究プロジェクトメンバーを心理学・医学・看護学Gと、創造Gの２グループに分け、互いに緊密な連携をとりながら研究を進める。嵯峨芸大のメンバーは創造G（香りのアート・デザイン研究）に所属する。心理学・医学・看護学Gの選定した高齢者にとって好まれる香りを使い、高齢者施設の実態把握を鑑みたうえで、高齢者施設でアート制作および展示を行う。アート制作には、認知症の人自身が参加し、出来上がったアートに物語性を付加し、所有者である認知症の人に愛着を抱かせるセミカスタムのユニバーサルデザインを用いる手法で行う。視覚や聴覚が衰え、認知力も減退した高齢者にとって、香りのアートは感情や記憶に直接的に訴えかけ、精神の奥深いところに達して生活に大きな影響を与える可能性を持つと期待する。

また、嗅覚と視覚の関わりをテーマにしたワークショップ、展覧会を日本国内のみならず、海外（特にフランス、イギリス、スウェーデンの研究者との連携を具体的に想定）においても積極的に実施し、制作と同時並行的に、これまでほとんど先行研究の見られない匂いのアート・デザインに関わる基礎的な理論構築を行うことを予定している。

採択が７月末に決定したので、実質的な研究開始が例年よりも少し遅れたが、特に下記３点に関して

●松本泰章教授による香りのアートパフォーマンス“Eurydice”の制作・発表（京都平安ホテル、ロンドンCSM、MA Art and Science）

※これについては本紀要69頁に報告書記載

●岩﨑陽子講師によるロンドン、CSM、MA Art and Scienceにおける香りのアートに関する講演会

●岩﨑陽子講師・真板昭夫教授・坂田岳彦教授による高齢者の「懐かしい匂い調査」のための調査票作成と、岩手県二戸市足沢での調査実施

※これらの研究はJSPS科研費25560018の助成を受けて実施された。

２．京都芸術センターにおける香りのアート日仏学生交流展「ここ・そこ・あそこ」の開催

３．フランス・サンテティエンヌにおける香りのアート日仏学生交流パフォーマンスOdor Odoriの開催

※上記２つの活動に関しては、本紀要25頁－29頁、また29頁－36頁をご参照ください。

４．ソルボンヌ大学哲学教授シャンタル・ジャケ先生招聘「香りと音楽」講演会開催

ソルボンヌ大学哲学教授シャンタル・ジャケ先生とは私が翻訳の監訳を担当し、昨年2015年８月に『匂いの哲学―香りたつ美と芸術の世界』（晃洋書房）を出版するより前からの長いおつきあいであるが、今年度は本研究会での招聘が叶い、同志社大学ハーディーホールで講演会を開催することができた。この講演会の通訳を岩﨑陽子が担当した。

その概要であるが、今回の講演のテーマは「香りと音楽」であった。既に述べた翻訳本の中でも、ドビュッシーの音楽と香りについての詳しい分析がある（ドビュッシーにおける匂いの音楽―≪ペレアスとメリザンド≫、「夜の薫り」、「音と香りは夕暮れの空気に漂う」、同書127－131頁）。

今回の講演では現代における先進的な技術によって可能になった、香りの音楽に焦点をあてた。これを独自の用語「音嗅的（sonolfactif=ジャケ先生の造語。sono音とolafactif 嗅覚を連結）」芸術と呼び、なぜ現代アートにおいて香りと音楽が結びつきやすいのかをその根源にさかのぼってひもとく作業が行われた。音楽はしばしば、香りの儚さや目に見えないことからインスピレーションを得ている。逆に香水の創造は音楽のリズムやノート（音符と調性）で表現される。ボードレールの『悪の華』でもこの音楽と香りの近しさが「万物照応」として表現されている。

こうした文学的な比喩や照応を越えて、実際に香りと音楽はここ数年緊密に結びつくようになってきた。香りのするコンサート、香りとメロディが混ぜ合わされたパフォーマンスなどが多く開催されている。こうしたことは現代アートの現場だけではなく、クラシック音楽においても調香師によって香りがつけられたり、ジャズのインプロヴィゼーションで香りが部分的に用いられたりしている。

講演会では具体的な現代の音楽作品を例として挙げながら、香りと音楽の豊饒な結びつきを説明され、理論としてのみならず、具体的な音楽活動と香りの結びつきが例示されて興味深いものであった。

講演会終了後の懇親会会場では松本泰章教授による香りのアートパフォーマンスが企画され、ジャケ先生の講演への日本側からのアートによる返礼となった。

※この松本先生の企画については本紀要69頁参照。

5．ロンドン大学附属・セントラル・セント・マーティンズ校のネイサン・コーエン教授講演会「アート、サイエンス、想像力」開催

７月６日にはロンドン大学附属セントラル・セント・マーティンズMA Art and ScienceのNathan Cohen先生をお招きして、京都嵯峨芸術大学で講演会を開催した。先生はセントラル・セント・マーティンズでアートと科学のコラボを実現する大学院のディレクターをしており、当日はご本人のアートや学生の作品について率直にお話し頂いた。

科学とアートは対極にあると思いがちだが、科学によって可能になった新しい知覚が存在し、それを呼び覚ますような科学的知見を使ったアートをいくつも見せて頂き、興味深い体験となった。来年度以降も科研や交流事業でロンドンに拠点を持ちたいと

願っており、今後もこうした交流活動を積極的に継続していく予定である。

6．ロンドンでの香りのアート講演会､パフォーマンス

先の５．に続く対の事業として、今度はPerfume Art Projectのメンバーが2016年12月にロンドンに赴き、ロンドン大学附属セントラル・セント・マーティンズMA Art and Scienceにて香りのアートについてのレクチャーやパフォーマンスを行った。

内容は非常な好評を博し、来年度からもフランスに続き、イギリス・ロンドンとも交流活動を続けていくことが正式に決定した。

7．教員と生徒による研究活動―香りの蒸留実験／沈香の人工栽培について京大でレクチャー聴講／伝説の香木伝来の地・枯木神社訪問

Perfume Art Projectでは学生との共同研究活動も重要な活動事業の一部として考えている。

今年度は特に外部との接触が多く、刺激的な研究活動を活発に行うことができた。

香りの蒸留実験

香りのコンサルlast note鈴木涙香様、GACCOH様 ご協力のもと、研究会メンバーで水蒸気蒸留の実験を行った。

香りを蒸留によって取り出すことができるのを目の当たりにし、興奮気味だった学生と岩﨑。取り出した匂いは髪の毛、ティッシュ、文庫本（新品）、古本（和綴じ）、ペット（ヤモリ）の寝床に使用していた木屑、枯れ葉、セロリなどの匂い、とよく意味のわからないものが多かったが、取り出してみると納得の香り。また、ティッシュの香りを採り出したつもりが、そのティッシュの置かれていた持ち主の部屋の匂い（体臭？）が取り出されたという珍妙な現象もあり、この匂いを絵具に混ぜて絵を描いてみたいなど、美大生ならではの反応があった。

美大生×科学という貴重な機会であった。

人工沈香

また2016年３月１日には知り合いのつてで、京都大学大学院薬学研究科薬品資源学の伊藤美千穂先生のもとに、人工沈香の栽培可能性について学生とレクチャーを聞きに訪れた。

伊藤先生は薬学の先生で、もともとは和漢生薬の研究をされていたが、その延長上で沈香の薬理研究もされ、ベトナムなどに東南アジアに何度もフィールド調査に行っておられる。

我々の関心は、あの効果で稀少価値をもつ沈香が人工的に栽培できるのか否かという点であった。

結局、それは非常に難しいことであるようで、成功したとは言い難い段階であるようだ。

しかしながら、伊藤先生のご好意で沈香の木（ジンコウノキ）が生育されている温室を見学。大きいものが20本ほどあり、1999年から育てられているものもあった。桂皮のもとになるシナモンの木や、シ

ソの原種、マングローブなど、様々な植物が生育されていた。また、鉢でジンコウノキの苗が育てられていた。

学生たちも活発に質問を行っていた。

香木伝来の地・枯木神社

日本では産出できない沈香の樹については、もっとも古くは日本書紀に淡路島へと流れ着いたという記述が残っている。

『日本書紀』巻第二十二　豊御食炊屋姫天皇　推古天皇「三年夏四月、沈水漂着於淡路嶋。其大一圍。嶋人不知沈水、以交薪焼於竈。其烟気遠薫。即異以献之。（三年の夏四月に、沈水、淡路嶋に漂着れり。其の大きさ一囲。嶋人、沈水といふことを知らずして、薪に交てて竈に焼く。其の烟気、遠く薫る。即ち異なりとして献る。）」（坂本太郎他校注、岩波文庫、第四巻、二〇〇一年。）

この記述を、伝承以外の何物でもないとあまり深く考えていなかったのであるが、研究会メンバーの國米翼に教えられ、実際に今でも香木伝来の地に神社があるというので行ってみることにした。

淡路島中部にある神社は海辺にある小さな祠のような建物で、いかにも香木が流れ付きそうな砂浜を背景に鎮座していた。香木が流れ着いたという伝承が今でも大切に伝えられていることに深い感動を覚えた。

神社に実際に何が祀られているのかは見えなかったが、流れ着いた香木はいくつかあったらしく、天皇に献上したもの以外の香木が収められていると聞く。

研究会の発展を祈念してお参りした。

8．味と匂い研究会、今後の展望

以上のように、2016年度の味と匂い研究会は、本学の四大・短大・専攻科・院生といったすべての領域の学生を巻き込みながら、昨年度に引き続き活動の場をロンドンにまでに広げ、精力的に研究活動をすすめることができた。また、新たに科研費も取得でき、研究活動を多岐に広げることができ、充実した一年となった。

来年度は科研の研究もますます国際的に軌道に乗る予定であり、また引き続き香りのアート日仏学生交流も行う予定である。

忙しさの中にも実施した活動については、学生たちとともに全て丁寧にまとめの冊子を作成、保存している。こうした地道な作業は研究者にとっても学生にとっても重要なことである。また外部の人々に

配布することにより、本研究会の多彩な活動を知って頂く好機ともなる。そして何よりも活動の結果をまとめて書くためには理論研究が必要になる。

今後もこのように実践と理論の研究をどちらも怠ることなく両輪として着実に回していきたいと考えている。